

研究ノート

離島高齢者にとっての待合室での対話の意義と 診療待ち時間の長さに対する想いの探索-質的研究

太田 龍一¹⁾²⁾ 笠 芳紀¹⁾

1) 雲南市立病院 2) 沖縄県立南部医療センター・こども医療センター附属南大東診療所

抄録

【背景】

待ち時間対策が診療所業務を円滑化し、待ち時間を減らすことによって診療所職員の満足度が上昇する可能性があるが、対話の時間減少によって「憩いの場」として離島診療所待合室の存在が失われる可能性もある。

【目的】

沖縄県離島における高齢者にとっての待合室での対話の意義と診療待ち時間の長さに対する想いの探索を探索することを本研究の目的とした。

【方法】

南大東村介護予防事業に参加している 75 歳以上の高齢女性を対象に 30 分程度のフォーカスグループインタビューを 2 回施行した。SCAT(Steps for Coding and Theorization)法を用いて分析した。

【結果】

12 の概念と 4 つのカテゴリーが抽出された。「対話による癒やし」として対話による健康増進や島への親近感の向上について挙げられた。「高齢者の苦境」として独居や疎遠な人間関係の辛さが挙げられた。「待ち時間の意義」として存在確認や個人に合った楽しみ方について挙げられた。また「待ち時間への感じ方」としてスムーズな診療体制や待ち時間の環境依存性などが挙げられた。

【結論】

高齢者は診療所待合室を対話と再会の場と考えているが、あくまで診療を待っている場であるという意識を強く持っており、待ち時間の長さは対話の質に大きな影響を与えないと考えている。

キーワード：対話、高齢者、診療所、待合室、待ち時間

1 はじめに

病院・診療所での患者待ち時間の長さが通院患者の満足度に関係しており、診察待ち時間が長くなるほど、患者満足度は低下

するとされている [1,2]。電子カルテシステムや病院全体のシステム構築による患者待ち時間対策が行われており、それが患者満足度につながっている [3,4]。一方で待

ち時間が短縮されても、患者ニーズがさらに高まり、患者満足度が一時的に上昇するのみで終わる可能性も示唆されている [5]。現在、高齢化と共に多様な慢性疾患を抱える高齢者が増え、診察時間が長くなる傾向にある [6]。高齢者の医療費の削減や無料化に伴って高齢者が病院や診療所の待合室に殺到し、「待合室のサロン化」と言われるくらい高齢者で混雑することが指摘され批判を集めている [6]。しかし高齢者が集まって対話を行うサロンが彼らの健康に有用であることも示されており、サロン参加により高齢者の健康の質の向上に繋がるとする指摘もあり [7]、病院や診療所の待合室がその役割をする可能性もある。

沖縄県離島診療所でも同様の問題が起っており診療所待合室が混雑することが多い。沖縄県南大東島にある南大東診療所でも1日に30名ほどの外来患者が受診し、医師一人看護師一人で診察を行っていたため、待ち時間が長くなっていた。それに対して待ち時間対策として南大東診療所では事務員の増員、予約制の導入を行い、平成25年度から平成27年度にかけて、待ち時間が49分から38分へと短縮し最長待ち時間も120分から90分へ短縮された。診療所業務の円滑化に伴い診療所職員の満足度は上昇していた。一方で沖縄県の離島医療の中では、沖縄県離島診療所の待合室が「憩いの場」として高齢者サロンの役割をしていると言われていた。今回、予約制にすることによる来院日の固定化や高齢者間の対話の減少によって診療所待合室がサロンとしての役割を失っている可能性もある。しかし現在のところ本邦で離島高齢者にとっての診療所待ち時間が生み出す対話の意

義について明らかにした研究はない。そこで本研究は離島高齢者にとっての対話の意義と待ち時間短縮による診療待ち時間に対する想いの変化を探索することを目的とした。

2 方法

・対象者

平成27年4月から沖縄県南大東村で開始された介護予防事業に参加していた同村在住の75歳以上の高齢者20名全員を対象として対象者の選出には合目的なサンプリングを行った。対象者は全員要介護認定を受けていないが、一部は要支援を受けており、基本的に自立した生活ができていた。沖縄県南大東村での介護予防事業の内容は75歳以上の高齢者に対して14時から16時まで島内にある村立集会場でリハビリ体操や手芸などを行う場を提供するものであった。

参加者は南大東村所属の保険師が情報提供し、それに対して自主的に参加していた。平成27年4月当初は隔週の木曜日のみだったが、徐々に頻度を増やし平成28年3月の時点では毎週月曜日と木曜日に行っていた。毎回の参加者の人数は10人で、全員女性であった。平均年齢は78.5歳(SD=4.6歳)であった。当事業は日中に行われており、男性のほとんどは農作業に従事していたため、女性のみ参加となっていた。対象者の95%(19/20人)が診療所に定期通院しており、対象者全員が1年に1回以上は何らかの症状をもって診療所を受診していた。

・実施場所

沖縄県南大東島で本研究を実施した。同

島の面積は30.57km²、人口は1423人(2016年3月)で沖縄本島の東に位置し、那覇空港から南大東空港まで411kmの距離がある。島から沖縄本島への移動手段は飛行機と舟があり飛行機は1日2往復、片道70分、舟は一週間に1往復、片道13時間を要する。

・インタビュー方法

平成28年3月第1週、介護予防事業が行われていた月曜日と木曜日にそれぞれ一回ずつ、対象者に対してフォーカスグループインタビューを行った。インタビュー回数に関して、理論的飽和を考え、グループメンバーを変えて数回行う必要があったが、曜日によって参加者が固定されていたこと、参加者が高齢であり彼らへの負担を考え、介護予防事業事業担当者と相談し、上記の2回のみインタビューを行った。インタビューガイドとして、「高齢者の方が一つの場所に集まって話をするのに対してどう思うか?」、「診療所の待ち時間についてどう思っているか?」、「診療所の待ち時間が短くなることについてどう思っているか?」、「診療所の待ち時間が長い場になるという意見についてどう思うか?」の4つの項目を作りインタビューを進めた。インタビューは筆頭著者(R.O.)が行った。インタビュー施行者は当時沖縄県南大東診療所の診療所医師として勤務していた。対象者の一部の主治医でもあった。当研究開始前に研究の概要について説明を行い、同意を得た。

・解析方法

インタビュー内容をICレコーダーで録音し、インタビュー終了後に逐語録を作成

した。逐語録をSteps for Coding and Theorization(SCAT)法を用いて、社会構成主義の立場から質的に分析を行った[8]。SCAT法はデータに記載されている内容をより一般的な表現へと変換する具体的な4ステップのコーディングと、積み重ねたコーディングから一般的な理論を導き出すとする手続きとから構成されている。以上のステップを通して、複数の概念を抽出し、概念をつなぐ形で各個人の語りの概要を簡潔に文章化した。その後、全体で概念を統合するために、概念とデータを継続的に比較しながら同様の概念を統合し概念名を洗練した。複数の類似概念からカテゴリーを生成し概念を分類した。分析過程においてまず筆頭著者(R.O.)がSCATの4つのプロセスをおこなった。その後、共著者(Y.R.)が4つのステップを一つ一つレビューし妥当性を確認した。そこから2名の研究者が協同して概念の抽出と統合と概念名の修正、及びカテゴリーの生成をおこなった。その後、信憑性を高めるため、インタビュー対象者に対して書面と口頭発表の形で介護予防事業の中で研究結果を提示した。その中で彼らからフィードバックをもらい、再び概念やカテゴリーについて再検討した。

・倫理的配慮

インタビュー対象者に対して、ヘルシンキ宣言に則り、いつでも協力を拒否する権利があること、不快なことがあれば、インタビューを中断できることを伝えた上で、参加を要請し、書面で同意を得た。本研究は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの医療倫理委員会の承認を得ている。(承認番号2015-10)

3 結果

フォーカスグループの参加人数は月曜日、木曜日それぞれ10名で合計20名であった。グループ間に参加者のオーバーラップはなかった。介護予防事業への参加回数は2～22回だった。2回のフォーカスグループインタビュー時間はそれぞれ35分、33分間であった。SCATの分析の結果、4つのカテゴリーと12の概念が抽出された。分析過程に関して表1にまとめた。以下、抽出された各カテゴリーと概念について記述した。カテゴリーは〈〉、概念は【】で囲んで示し、対象者の具体的な発言は「」で示した。

・〈対話による癒やし〉

【孤独からの解放】

南大東島の高齢女性は日中家で過ごすことが多かった。家が点在しているため、なかなか友人に会うこともできなかった。そのような環境の中で今回の予防事業が出来たことによって、家で1人で過ごす時間が減り、限られた時間だが、多くの高齢女性と時間を共有することでそれぞれの孤独の癒に繋がっていた。

「家にいるとね。こんな感じで集まる所に来て、話したりするとスッキリしたり、元気になるね。一人じゃないと思えます。」

「1人の時間も好きだけど、そればかりだとだんだんね。。。みんなと時々会って話せると気持ちが広がります。」

自分の意志で介護予防事業に参加してい

るため、前向きに他の仲間と会うことが出来き、合う機会に対して生きがいと感じていた。

【身体の癒やし】

集団で集まって体操などで体を動かすことによって、身体的なストレスの緩和を実感していた。お互いに集まって話をしながら運動をすることがリラックス出来る環境下でのリハビリテーションの様な働きを起こしていた。参加者の発言として、

「(家でばかりの生活をしていることについて聞かれて) 普段はボヤーンとして身体が痛いけど、ここに来ると、身体が軽くなる感じがする。みんなで踊りをしたりすると、なんとなく体が動きますね。」

対話を行うことによる精神的ストレスの解消が身体的なストレスの軽減にもつながり、高齢者女性の生活を身体的な面からも支えていた。

「やっぱり人と一緒に運動するのは楽しいね。昔を思い出しながら出来るし、やっている最中は足腰は痛いけど、終わったらスキップしてます。」

【元気を与える対話の場】

介護予防事業によって対話の場が定期的にもたらされたことによって、高齢女性によって毎週の楽しみの時間が増えていた。対話をすることによってお互いに近況を知り、感情を表現する場を得ることができて

いた。参加者の発言として、

「こういう場ができてよかった。みんなニコニコしてるし、喜んでます。毎週のこの時間を楽しみにするようになってます。」

1人での抑うつだった時間を他者と共有することによる感情面でのストレスの緩和によって生活へのモチベーションを高めていた。

「1人でいると喋る人がいないけど、ここだと友達もいるし、落ちこんだこととか話せるし。困ったこととかも少し話したりして、簡単に解決したりします。」

【我が島への親和感の向上】

南大東島は高齢者にとって住みにくい場所であった。サトウキビ産業を中心として労働者の島であり、住民は高齢化する中で島での生活しにくさを感じ、介護が必要になると島外に出ていた。介護予防事業のなかで、高齢女性たちは島での今後の生活が変化する可能性を実感し、今後、島での生活の長く続けられることに対する希望を強めていた。

「(将来の島での生活について)本当はここに住めないかなと思っていたけど、これが出来て、一生ここにすまないとな、と思ってますよ。年をとっても楽しく生活できたらそれがいいね。」

「島もどんどん年寄りが増えてるし、どんどんこういう場を増やせば、楽しく島で生

きる年寄りも増えると思う。やっぱりここがいいからね。」

一生は過ごせないと思っていた生まれ育った場所が終の棲家に来るかも知れないという気持ちが島への思いを強めていた。

・〈高齢者の苦境〉

【孤独のもたらす辛さ】

多くの離島の高齢女性が日中は家で1人の生活を余儀なく慣れてきた。その中で孤独感を感じることも多くなっていた。参加者の発言として、

「畑がある人はいいですよ。私なんかずっと家でしょ？朝の仕事が終わったらもう、何も無いですよ。」

家で一人でいる時間が長くなることによって生活の空虚感を感じ、それが生活の辛さへとつながっていた。

「ずっと一人は辛いですよ。お父さんは畑に行くけど、私はひとり。何かしようにも車も運転できないし、生きがいがなかったかな」

【疎遠な人間関係】

同じ地域に住む高齢者でも普段はほとんど合う機会が無かった。各自が家から出る機会が少なくなりお互いの関係性を疎遠にしていた。近所の人に対して会いたいという気持ちはあるが、長期間会っていないことや、相手の用事を考えてその機会を逃していた。

「近所づきあいはほとんど無いですね。病院でしか会わない人もたくさんいますよ、同じ地区でも。」

人間関係が疎遠になるにしたがって、会おうと言う気持ちが徐々に遠のいていっていた。

「長く会ってないと、わざわざ会いに行くとは思わないね。どうしてるかねとは思いますが、行こうとしたことはないわ。」

【高齢者にとっての距離感】

南大東島は人口1500人程度の離島だったが、家が点在しており、各家の間にある程度の距離があった。自動車を使えば数分で行ける距離でも自動車に乗れない高齢者や足腰に病気を抱える者にとっては大きな障害となっていた。

「会っていない人はたくさんいます。車に乗れる人は良いが、なかなか遠いところに住んでいる人には会いには行けませんね。」

物理的距離感よりも、高齢者自身が感じる感覚的距離感が高齢者の地域での孤独感を強める要因となっていた。

「年取ると家から動きにくいですね。からだも痛い時があるし、若い頃みたいにスイスイとは行きせんよ。つらいですけどね」

・「待ち時間の意義」

【存在確認】

診療所待合室には島中から多様な人達が訪れていた。その為普段会うことが少ない高齢者同士も診療所通院という機会を通して、お互いが島にいること、お互いが生き生きとやっていることを確認していた。

「診療所では会って見たかった人にも会えるし、やっぱり島にいたんだって言える人もいるし、本当にいない人もいるけど。」

「久しぶりに話すといろいろ話が盛り上がりますね。なんていったってその知り合いの話が面白い。島で起こってることをいろいろ知れていいですよ」

診療所通院という行事を通して、高齢者たちは定期的な会う機会を得た。それによってお互いの現状を確認し、島の事情にも詳しくなることで一種の安心感を得ていた。

【個人にあった過ごし方】

待ち時間の過ごし方は個々の高齢者で大きく違っていた。診療所通院の日は仕事を休んで来る方や仕事や家事の合間を縫ってくる方など様々だった。その為、仕事をしている高齢者からはできるだけ早く診察を終えて帰りたいというニーズがあった。

「ちょっと仕事している人はあれははずよ。私はしている方だから、待ち時間は短いほうがいい。来て少し話して診てもらいたいさ。」

一方で、診療所通院以外に行事がない高齢者にとっては待ち時間をゆったりと過ご

すこともひとつの楽しみとなっていた。

「その日はやることが無いからね。診療所で待たされてもあまり嫌ではないね。時間があれば、物考えしたり、そこにいる人と話しますよ。」

・〈待ち時間への感じ方〉

【スムーズな診療体制】

診療の待ち時間が減っていることに関して、予約制による適正化を実感していた。予約することによって予定した時間に診察してもらえ、診療所が混雑しないことによる急時の臨機応変な対応が可能になっていることに対して好意的に考えていた。

「先生が待ち時間を調整してくれるのがありがたい。何かのときには早めて診てくれるし、予約どおりに来れば薬もとんとんと出てくるので助かります。」

予約することによって待ち時間が短くなることを認識して、予約していることに対する優越感もスムーズな診療体制へつながっていた。

「予約通り来ると安心感がありますね。なんというかちゃんと診てもらえるというか。「私予約してます」って言います。飛び込みよりも決まった時間に来たほうがすぐ終わるし」

【有効活用方法としての対話】

高齢者は待合室での対話を一つの有効活

用法と考えていた。待ち時間があれば、一緒にいる人と話をするが、待ち時間が終わっても話そうとは思っていなかった。

「待つてまでは喋りたくないな。知っている人がいればちょっと話が話しますけどね。自然と話しますから。終わって帰るまでぐらいですよ。診察が終わって、お薬の準備が出来るまでの時間を使っていますよ。」

診療所は診療を受ける場であり、対話は偶発的な楽しみであること、あくまで待ち時間を使うための一つの方法であることを認識していた。

「診療所の待合室はもともと静かにするところですからね。待つ時間に多少の会話はいいけど、診療が終わったのに話してたりはしたくない。あくまで病気の人が来て話すところですから」

【場所依存的な時間感覚】

南大東診療所以外での診療を受ける際に感じる待ち時間の違いを実感していた。待合室にいる人が知らない人ばかりだと待ち時間を長く感じたり、退屈であると感じていた。

「那覇の病院は大変。待ち時間が退屈だから。知っている人もいないし、こっちは一時間待つても知っている人ばかりだからみんな。話して遊ぶから。」

また南大東診療所以外での診察では職員も初めて会う人が多いため、待ち時間に緊

張感を感じるようになっていた。

「診療所は先生も受付の人も顔見知りだし、毎回喋ってるからいいけど。知らない場所だと、見てもらうまでドキドキするわ。きついこといわれたりしたらどうしようみたいな。」

4 考察

本研究から離島高齢者は対話の場をえることによって身体的、精神的に健康になっている可能性がある。離島診療所の待合室は対話と再開の場になっているが、待合室はあくまで診療を待っている場であるという意識を強く持っており、待ち時間が短くなったことによる対話時間の短縮は離島高齢者の対話の質に大きな影響を与えないと考えられた。

離島高齢者にとって対話できる場所は彼らの精神的並びに身体的な健康にとって大切であると考えられる。本研究で「高齢者の苦境」として離島における彼らの孤独感や疎遠な人間関係が語られていた。沖縄県以外の僻地でも高齢者の孤独は大きな問題となっており、高齢者が自分の住み慣れた場所で長く生活していくためには、情報交換だけでなく人間的繋がりを意識できる安心感が大切であるとされている [9]。そのために地域全体が協力して高齢者同士の繋がりを保つために、対話を含めた有効な人間関係を作る仕組みが大切であることも示唆されている [10.11]。今回沖縄県南大東島で平成27年4月から始まった介護予防事業によってもたらされた高齢者の対話の機会は高齢者の情報交換のためだけでなく、彼らの孤独感を解消するためにも非常に重

要である。さらに地域住民が自分自身の住んでいる地域への親近感を高めることによってもたらされる「地域愛着」[12]が、今回、対話の機会をえることができた高齢者の感情として【我が島への親和感の向上】と表現されている可能性がある。今後、沖縄県南大東島でも対話の機会が増えることで地域愛着によってもたらされる連帯感や地域活動のさらなる活性化 [12]につながる可能性があると考ええる。

離島高齢者は離島診療所の待合室を、診療を受けるまで待っている場所という意義を忘れずに、その時間の「有効活用方法としての対話」の存在を意識していた。また診療所待ち時間が短くなることによる対話時間の短縮が彼らの待合室での対話の質に大きな影響を与えるとは感じていなかった。今回、診療所の待合室がサロン化することによって、高齢者にとっての「憩いの場」となって可能性がある。一方で高齢者は診療所の待ち時間対策に対して【スムーズな診療体制】の構築につながっていると感じており、時間の短縮に対して陰性感情は抱いていなかった。これには診療所という場所の特性が大きく影響している可能性がある。へき地住民間にある強い絆が効果的な互助につながっている可能性はあるが [13]、繋がりが強すぎるため、個人情報取り扱いが難しい場合があり、プライバシーを守ることが難しいとされている [14]。島民も一人の患者として診療所を受診しており、自分自身の疾患に関する情報を知られたくないと感じていた可能性がある。また診療所待合室はあくまで診療を待つための場所であり、普段のサロンとは環境が大きく異なると考えていた可能性もある。そのため、

診療所待合室では表面上の会話しか起こらず、サロン化することが少なかったと考える。表面上の会話では十分な対話の意義が得られないため、今回の待ち時間対策によって待ち時間が短縮したことによる対話時間の短縮に対しても否定的な考えが出なかった可能性がある。

また本研究より「存在確認」としての診療所待合室の機能が語られていた。僻地に住む高齢者がお互いに顔を合わす機会が少なく、彼らの孤立が問題になっている[15]。今回、診療所での意図しない島民との再開が各自の存在確認につながっていた可能性がある。離島だけでなく、僻地での島民同士の一つの接点としての診療所の役割があることが考えられる。

本研究の限界として、対象者が全て女性であり、意見の偏りが出た可能性がある。意見の偏りをなくすために、フォーカスグループインタビューによる研究を試みた。しかし離島でのグループインタビューでは参加者同士が親しく、お互いの個人情報に配慮し、自分の個人情報を出したくないという思いから十分な発言を引き出すことができなかった可能性がある。フォーカスグループインタビューが2回しか実践できなかったため、当研究の一般化可能性には限界があると考えられる。待ち時間の短縮に関して10分程度であったため、高齢者がその短縮を実感できていなかった可能性やインタビューワーが診療所医師であり対象者とインタビューワーが患者医師関係にあったことが影響して本研究では待ち時間対策に関して否定的な意見が出なかった可能性があると考えられる。

5 結語

本研究より高齢者の対話の場は彼らの孤独を癒していた。離島診療所の待合室は対話と再会の場と考えていたが、診療を待っている場であるという意識を強く持っており、待ち時間の長さは重要とは考えていなかった。

COI

本研究に、開示すべきCOIはありません。

謝辞

当研究の実施に当たって、当研究に参加して下さった南大東村介護予防事業参加者の方々、並びに本事業を開催されている南大東村役場職員の皆様のご協力に感謝申し上げます。

表の説明

図1：本研究を行った沖縄県南大東島の位置を示している。



表 1

グループ	ストーリーライン	理論記述
月曜日	<p>高齢者にとっての距離感が島での疎遠な人間関係を生んでいると考えており、高齢者同士の対話の場があることによって、孤独からの解放や対話のもたらす身体の癒しを実感し元気を与える対話の場の存在を実感している。さらに新たな対話の場がもたらされることが独居のもたらす辛さを解消し、我が島への親和感の向上につながっている。その中で体験を通して高齢者それぞれの生活スタイルにあった仕事と楽しみの調整や高齢者にあった楽しみ方やその中で集中することの大切さが重要であると感じている。</p> <p>診療所の予約制を導入したことによるスムーズな診療体制を支持し、安否確認の場としての待合室、存在確認としての待合室の重要性を感じている。待ち時間の長さに関して、女性特有の旧友関係の喜びのためには必要と考えている一方で、与えられた待ち時間の有効活用としての対話を大切にしている。離島以外での病院待ち時間でのつまらなさを感じることによる場所依存的な時間感覚、男女間に存在する男女による待ち時間感覚の違いを認識している。</p>	<p>対話の場は、高齢者の孤独を和らげ、精神的、肉体的健康をもたらす。</p> <p>対話の場が孤独感の解消とともに島への親近感を増やす。</p> <p>対話への参加方法も高齢者の生活スタイルによってさまざまである。</p> <p>安否確認や存在確認としての診療所待合室の存在意義がある。</p> <p>高齢者特有の地理的距離感がある</p> <p>女性特有の待ち時間に行われる交友関係からの喜びが存在する。</p> <p>与えられた待ち時間を有効利用している。</p> <p>待ち時間に場所依存性がある。</p>
木曜日	<p>離島の高齢者の現状として、単調な毎日の苦痛や高齢者の孤独感を感じており、高齢者が集まる場所ができたことによって、同世代の人と集まること自体への楽しさ、お互いの近況を話し合うことによる対話への楽しさ、そして今までなかった新たな楽しみを非日常の楽しみとして考えている。</p> <p>予約制の導入によって、待ち時間の短縮による円滑な診療体制の構築がもたらされ、定期受診の効率化や受診漏れ防止につながっていると感じている。また予約制の中で、人数調整を行うことによる医師による効率的な調節を可能にし、急時の調節などにも対応できると感じ、さらに医師の人間関係の構築が予約制の導入に効果的な影響を起していると考えている。</p> <p>顔の知れた関係がもたらす対話時間の重要性和忙しさに合わせた待ち時間使用方法に関するバランスの大切さを感じている。</p> <p>待ち時間の内容に関する待ち時間の場所依存性の存在を認識している。</p> <p>診療所での予約制システムの継続性を意識しながら、医療資源としての診療所を意識し、場所にあった医療システムを認識し待ち時間の有効活用を行っている。</p>	<p>対話が高齢者の楽しみにつながっている。</p> <p>離島高齢者が孤独や単調な毎日に苦しんでいる。</p> <p>予約制の導入は、診療の効率化をもたらし、患者の受診を円滑にしている。</p> <p>一定の待ち時間は高齢者に憩いの場を提供しているが、個々の状況によって、その感じ方は違う。</p> <p>待ち時間は環境によって感じ方が違う。</p> <p>予約制の継続性と限りある医療資源としての診療所を意識している。</p> <p>場所依存性の医療システムの中で待ち時間を有効活用している。</p>

<p>統合後</p>	<p>離島高齢者は独居や人間関係が疎遠であることによる孤独感がもたらす辛さの中で生活をしてきた。村の事業によって対話の機会を得ることによって孤独からの解放が起り、身体的かつ精神的な癒しを得ていた。また対話の中で自分の住んでいる場所に対する親近感を高めていた。</p> <p>診療所の待ち時間が減ったことに対しては有意義と感じていた。待ち時間を友人の存在確認の場として考え、久しぶりに会う旧友との再開を楽しんでいた。待ち時間は人それぞれ使い方があり、個々にあった使い方を意識していた。</p> <p>待ち時間の長さは関係なく与えられた待ち時間だけ対話に使うという意識を持ち、病院は病気を診てもらうところと考えていた。また診療所と病院で流れる待ち時間は全く違うものであることを認識していた。</p>	<p>「高齢者の苦境」として、他の世代が感じることが少ない【高齢者独特の距離感】やそれによる【疎遠な人間関係】、そして【独居のもたらす辛さ】があげられた。</p> <p>「対話による癒やし」として、対話する機会を得ることによって【孤独からの解放】が起り精神的な物家でなく【身体の癒やし】も実感していた。また対話を重ねることが自分自身の住む場所に対する【我が島への親和感の向上】へつながっている。</p> <p>「待ち時間の意義」として、普段ほとんど会うことのない島民間の【存在確認】の場所として認識していると考え。待ち時間の使い方は、人それぞれで、【個人にあった楽しみ方】があると考えられる。</p> <p>「待ち時間への感じ方」として、予約制を導入することによって待ち時間が短縮したことを受けて【スムーズな診療体制】を実感している。また待ち時間を有意義にするために【有活用方法としての対話】を行っていると考えられる。病院と診療所で流れる時間の違いを認識し【場所依存的な時間感覚】を感じている。</p>
------------	---	---

引用文献

- [1] Fabian Comacho, Roger Anderson, Anne Safrit, et al. The relationship between patient's perceived waiting time and office-based practice satisfaction. *NC Med J.* 2006; 67: 409-413.
- [2] Clifford Bleustein, David B. Rothschild, Andrew Valen, et al. Wait times, patient satisfaction scores, and the perception of care. *AJMC.* 2014; 20: 393-400.
- [3] Xiao-Ming Huang. Patient attitude towards waiting in an outpatient clinic and its applications. *Health Services Management Research.* 1994; 7: 2-8.
- [4] 米澤健三, 山口勇, 石澤文章, 他. 病院薬局における待ち時間対策の効果と評価. *病院薬学.* 1991; 17: 476-481.
- [5] 今井隆之. 待ち時間短縮プロジェクト-患者さまの「直接的待ち時間」と「感覚的待ち時間」の短縮. *医事業務.* 2006; 13: 13-19.
- [6] 坂本圭. 日本の医療財政の現状と課題. *川崎医療福祉学会誌.* 2005; 14: 249-259.
- [7] 北村隆子, 臼井キミカ, 筒井裕子, 他. 地域サロン参加による高齢者の自尊感情に影響を及ぼす要因. *人間看護学研究.* 2004; 3: 1-9.
- [8] 大谷 尚. SCAT: Steps for Coding and Theorization-明示的手続きで着手しやすい小規模データに適用可能な質的データ分析手法- *感性工学* 2011; vol10 (3):155-160 .
- [9] 石橋文枝. 農山間地域の高齢者が「できる限り在宅生活を継続する」ために必要な要件：民生委員の活動を通し高齢者の生活の実情と課題を探る. *梅花女子大学看護保健学部紀要.* 2016; 6: 10-24.
- [10] 小松理佐子. 過疎地域における地域包括ケアシステム構築の可能性. *日本福祉大学社会福祉論集.* 2016; 134: 31-47.
- [11] 當山富士子, 戸田圓二郎, 田場真由美. へき地山村に居住する独居高齢者の“生活の術”-参与観察で把握した生活実態から-. *沖縄県看護大学紀要.* 2003; 4: 79-85.
- [12] 鈴木春奈, 藤井聡. 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究. *土木計画学研究・論文集.* 2008; 25: 357-362.
- [13] 平山恵美子, 登内芳子. 看護学生が捉えた「へき地」に暮らす人々の生活・価値観. *飯田女子短期大学紀要.* 2005; 22: 113-122.
- [14] 川崎道子, 永吉ルリ子, 牧内忍, 他. 沖縄県における保健師駐在制のメリット・デメリットおよび継承すべき能力. *沖縄県立看護大学紀要.* 2012; 13: 39-4
- [15] 伊藤智子, 加藤真紀, 渡部真紀, 他. 地域を基盤とした老年看護基礎教育における学生の学び-中山間地域での高齢者の暮らしから-. *島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要.* 2010; 4: 101-110.